

氏名（本籍地）	赵 翻（中国）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第388号（甲文第45号）		
学位記授与の日付	平成27年9月25日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	日本語と中国語における謝罪の社会言語学的研究 —対人関係と地方差に着目して—		
論文審査委員	主査	教授 博士（文学）	三宅和子
	副査	教授 博士（文学）	菊地義裕
	副査	教授 博士（文学）	岡崎友子
	副査	教授 博士（日本語日本文学）	有澤晶子

## 【論文審査】

### 1. 論文の概要

趙翻氏の研究は、現代の日本社会と中国社会における謝罪言語行動の異なりを、言語的特徴、対人関係観、地方差の視点から照射し、日中間に横たわる誤解や違和感の要因を追究するとともに、日中の謝罪言語行動の全体像の解明に寄与することを目指したものである。

言語研究における「謝罪」というテーマは、1970年代以降に欧米を中心に盛んになった発話行為論や語用論の研究において重要な研究対象として浮上り、その後、語彙や表現レベルの「言語表現」研究の枠組みを超えた、対人関係の相互行為研究や社会の言語行動規範を探る研究へとその射程を広げてきている。しかしながら、中国では、語用論や社会言語学的な観点からの言語研究そのものが非常に少なく、「謝罪」の研究も語彙や表現に関する論考が中心であった。また、日本と中国の謝罪行動を比較対照する研究も、まだその緒についたばかりであるといえる。趙翻氏はこの点に留意し、自らの研究に社会言語学的手法を取り入れ、日本と中国の異なる方言地域にある4都市で行った実態調査に基づき、統計的手法を加えながら、「謝罪」の日中対照研究を行った。研究の主眼が置かれたのは、（1）日中に横たわる誤解に基づくステレオタイプの醸成の要因の解明、（2）日中における定型的な謝罪表現の使用／不使用に影響を与えている対人関係観や家族観の究明、（3）地方の方言使用と標準語化の過程が謝罪言語行動にいかに関わるかの追究である。

なお、本論文で用いられている「謝罪言語行動」という用語は、「謝罪」を言語表現の

みに注目して分析するのではなく、社会的行為としての「言語行動」ととらえて分析することを意味するものである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 序章 日中の謝罪言語行動研究の意義
- 第Ⅰ部 日本語と中国語の謝罪言語行動の研究と調査結果
  - 第1章 謝罪言語行動研究の全貌と本研究の位置づけ
  - 第2章 本研究の謝罪言語行動の研究方法
  - 第3章 日本語と中国語の謝罪における言語表現
  - 第4章 日本語の調査結果の分析
  - 第5章 中国語の調査結果の分析
- 第Ⅱ部 日本語と中国語の調査結果の比較分析と考察
  - 第1章 言語的特徴が反映する日本語と中国語の謝罪
  - 第2章 対人関係観が反映する日本語と中国語の謝罪
  - 第3章 地方差が反映する日本語と中国語の謝罪
- 終章 結論

本論文の概要は以下の通りである。

序章では、日本と中国においてしばしば問題になる謝罪に関してのステレオタイプや誤解、すなわち「日本人はすぐに謝るが誠意がない」、「中国人は自分の過失であっても謝らない」といった双方の見方が存在することの指摘に端を發し、日中間の謝罪に関する具体的な実態調査の必要性が指摘された後、本研究の背景と研究の目的、研究の方法が述べられ、第Ⅰ部と第Ⅱ部の構成が紹介されている。

第Ⅰ部第1章ではまず、謝罪言語行動研究における「言語行動」と「謝罪」の二つの基本概念が、主に語用論と発話行為理論から解説されている。次に日本語の謝罪研究、中国語の謝罪研究、日中の謝罪の対照研究の順に、従来進められてきた研究の論評を行い、それらの研究の主眼が謝罪の遂行に関わる社会的・心理的要因の分析と言語表現・方略におかれ、上下関係や利益関係に注目が集中していたことを挙げ、これまで着手されていない研究対象として、親しい間柄における謝罪、および地域における謝罪行動の異なりがあることが指摘されている。

第2章では、本研究で採用した研究方法が具体的に解説されている。まず言語行動研究において遂行される主な調査方法の概観と検討が加えられ、本研究遂行に最適な方法としてアンケート調査を選択する理由が述べられた後、具体的な調査内容、調査対象者およ

び実施方法の説明が行われている。調査内容として、過失の程度（軽度・中度・重度）の設定方法、謝罪相手（母親と親友）、調査対象者（東京、大阪、大連、杭州の大学生）が説明された後、データの分析方法と分析の手順について解説が加えられている。

続く第3章～5章は、日中4都市で行った調査の結果を示し、分析に必要な概念や方法の解説が続き、具体的なデータの分析に移っている。

まず第3章では、日中の回答例を提示しながら、両言語を中立的かつ客観的に比較対照するための分析方法として、意味公式という単位を導入している。次に、意味公式の単位に添って、回答の言語表現を大きく定型表現と非定型表現とに分けたことが説明される。謝罪の「定型表現」とは、「ごめん」や「すみません」のごとく、謝罪場面において広く慣用的に使われ、「謝罪のことば」と一般的に認識されている表現をさす。定型表現以外で謝罪場面に現れる表現類、「大丈夫?」、「私の不注意だった」、「同じものを買って返すね」などを「非定型表現」とし、さらに下位分類した後、その分類法と各意味公式の定義を、回答例を示しながら解説している。

第4章は日本語データの分析である。まず東京と大阪の2都市を統合した回答の意味公式の分布を場面ごとに示し、統計処理を加えながらその特徴を分析し、ついで東京と大阪の2都市間の異なりも同様に分析している。この分析で明らかになったことは、日本語では定型表現が非常に多く使われ、非定型表現の使用は限定的であること、東京と大阪の間には定型表現の使用頻度に大きな異なりはみられなかったことである。

次いで第5章では、中国語データを第4章の日本語と同様に分析している。分析の結果明らかになったのは、定型表現の使用が日本と比較して少なく、非定型表現の使用が多いこと、対母親と対親友の間では意味公式の使用に大きな異なりがあること、また大連・杭州の比較においても、対母親と対親友との間で意味公式の使用傾向が大きく異なることであった。これらの結果は、統計処理によってさらに検討が加えられるが、いずれにおいても有意な差であることが判明している。この日中対照調査から浮上してきた結果が、第II部において考察されるべき問題として焦点化されている。

第II部は、第I部の分析を踏まえ、日中4都市の謝罪表現使用の特徴と相違の要因解明に向けて、言語的特徴が反映する謝罪（第1章）、家族観・対人関係観が反映する謝罪（第2章）、地方差が反映する謝罪（第3章）の3視点による考察が行われている。

第1章では、日本語において定型表現の使用が多く、中国語においては非定型表現が多い要因について、それぞれの言語学的特徴に解を求めている。具体的には、日本語には定型表現〔ごめん系〕〔すまない系〕〔申し訳ない系〕のバリエーションが多数存在し、そのバリエーションが相手や場面により使い分けられること、膠着語の特質として語形変化や語尾の変化、終助詞の付加などが行われ、バリエーションがさらに多様となり、程度副詞

も多数使われることによって、相手との関係や負担度に応じた細かいニュアンスが表現できることを指摘している。いっぽう中国語では、定型表現「对不起」、「不好意思」、「抱歉」には語形変化がなく、謝罪においてはまず定型表現を使用するか否かが、対人関係や負担度に合わせて選択されていること、定型表現を使用しない場合も多彩な非定型表現が多用されていることがデータから明らかにされている。

現象のみを捉えると、定型表現を使用する頻度の少ない中国人から見れば、過失の大小にかかわらず定型表現を常時使用している日本人は心から謝っていないとの印象がもたれやすい。一方、定型表現の使用がほぼ必須で、それなしでは相手が謝っているとは受け取れない日本人から見れば、定型表現の使用が少ない中国人は、自分の過失であるにもかかわらず謝らず横柄な態度をとるという印象がもたれやすい。日中のデータを詳細に検討することにより、日本語話者も中国語話者も謝っているものの、謝罪の表現方法が異なるため、それぞれの社会の異なる言語行動規範に基づく双方の謝罪に対する認識にずれがあり、否定的なステレオタイプの醸成や誤解につながっていることを明らかにしている。

第2章では、母親と親友に対する謝罪が日中で異なる要因を、家族観と対人関係観の異なりから考察している。まず、日本語では母親と親友に対する定型表現の使用率がほぼ同じであるのに対し、中国語では対母親が対親友に比べて大幅に少なく、統計的に有意であることが示される。この実態について、趙翻氏は社会学・人類学の知見を援用しつつ、日本と中国の「家」意識、血縁や家の継承と関わっての家族の把握のされ方などを多角的に比較・検証している。そして、日本では家族はウチ関係、親友はウチに近いソト関係として扱われるが、定型表現使用の頻度はほぼ変わらないのに対し、中国では、親友は「疑似家族」として扱われるものの、家族は他のどの関係とも異なるものとして認識され、それが定型表現の使用頻度に如実に反映していると考察している。

第3章では日中の地方差に着目し、東京と大阪、大連と杭州の意味公式の使用傾向の相違を、方言と標準語化の観点から論じている。対母親と対親友における意味公式の使用傾向は、東京と大阪では大差がないのに対し、大連と杭州では大差が現れ、杭州における対母親の定型表現が統計的に顕著に少なかった。趙翻氏はこの要因を、中国の地域ごとの方言の使用差と標準語化に求めている。中国は近現代の標準語化政策により、国土の多くを占める官話方言地域で標準語化が進んだが、南方を中心とする地域では方言が根強く、現在でも公的場面では標準語を、私的場面では方言を用いる二言語併用地域である。大連は北方の標準語に近い官話方言地域、杭州は南方の標準語とかけ離れた非官話方言地域の中の呉語方言地域にある。杭州の回答に対母親の謝罪が少ないのは、もともと感謝や謝罪の定型表現がない方言を家庭で使用しているからであり、親友に定型表現が多いのは、他の地方から大学に来ている親友には標準語が、地元から大学に来ている親友には方言が使われるからであると結論づけている。

趙翻氏はまた、杭州調査で別途設けたアンケート項目の回答者が、方言音の定型表現を、その発音に近い標準語の漢字に当てはめて回答している事実に注目している。そして、これらの当て字の使用は、謝罪の定型表現がなかった杭州の回答者に標準語の言語行動規範が徐々に浸透し、方言音による謝罪の定型表現が使われ始めていることを示唆するものであると指摘している。趙翻氏はさらに、方言主流地域における謝罪定型表現の変化プロセス・モデルを構築し、変化の過渡期にある杭州では、今後若者を中心に、私的場面での方言音による定型表現、公的場面での標準語の定型表現の二言語併用状態が定着していくことを予測している。

以上を踏まえた終章においては、各章をふり返って研究の成果をまとめるとともに、今後追求すべき問題点やさらなる分析が図られるべき諸点について整理されている。

## 2. 審査の概要

本論文の特徴を一言で捉えれば、実態調査によって得られたデータに基づき、言語学、人類学、社会学などの広汎な研究を援用した分析と考察による、謝罪の社会言語学的研究であるとまとめることができる。

本論文は、従来謝罪研究で取り上げられてこなかった対象（親しい間柄）を扱い、「家族」、「都市化」といった社会学の観点を取り入れた独自の研究スタンスをもっており、こういった方向での研究は従来ほとんどなされていないことから、その独創性による今後の発展が期待される。また、日本と中国という異なる歴史文化を背景とした言語を扱い、日中対照研究において方言にまで踏み込んだ調査・分析・考察を行ったという点でも、極めて意欲的な論文であるといえよう。

方法論として高く評価したいのは、実態調査によって得られたデータを丹念に検討していく実践的なアプローチをとっている点であり、さらには、論考の客観性を高めるためにデータ分析の際に統計的手法を駆使している点である。本研究で拓かれた研究の視点や方法は、謝罪言語行動研究の新たな可能性を導く発展性のあるものであり、今後の謝罪表現研究を含む配慮表現研究に、有効な観点を提示しえたものとして評価できる。また、日中の4都市において収集されたこれらのデータは、従来にない研究の基礎資料として今後の研究に益するところが大きい。

研究成果としては、日本と中国社会に根強く残るステレオタイプに誤解のあることを実証的に示している点が評価できる。日常的な言語現象は、一般に漠然と感じたり印象論で結論づけたりされることが多々あるが、そこで醸成されたステレオタイプは異文化間の軋轢にまで広がる根をもっている。その実態を客観的に検証・確認して巷間の誤解を解いていくことが重要であり、かつ社会言語学の使命ともいえる。本論文はこの点でも、社会に

還元できる研究結果を導き出していることが特筆される。

さらには、中国の謝罪言語行動の実態には歴史的、社会的特質が不可分に関わっていること、地域差による謝罪言語行動の違いには必然性があることが分析によって示されている点も注目される。特に、第Ⅱ部第3章は本研究中でも最も力点が入られたところだが、調査で顕在化してきた中国の非官話方言地域における方言使用の変化過程を3段階に分けて示した標準語化のプロセス・モデルは、日本語と中国語以外の言語や、他の言語行動においても検証されてよい貴重な視点として高く評価できる。

今後さらに研究の深化を期したいこともある。本研究が日中の方言にまで踏み込んだ対照研究を志向していることから、東京、大阪、大連、杭州のいずれにも偏らない対照研究の方法と内容を追究するという課題に答えていく必要がある。また、対象地域の言語の歴史的蓄積などの言語背景、回答者の言語感覚、世代・階層などをより深く把握することにより、さらに密度の濃い研究が期待できよう。今後は、家族や親友とは異なる間柄における謝罪言語行動の研究の成果と本論文の成果を比較対照することにより、日中の謝罪言語行動の全貌を鮮明に描き出していくことを期待したい。

最後に、本研究から得られた知見は、その問題意識の立て方と射程の広さから、社会言語学、言語研究に資するのみならず、異文化間コミュニケーション、日本語教育学などの広汎な分野においても、多くの有益な示唆を与えるものであることを強調しておきたい。

なお趙翻氏は、日本文学の中国語訳著をすでに上梓していることが示すように、高度な日本語能力を有しており、自由記述によるアンケート調査のデータ整理・分類、分析という緻密な作業の遂行や、微妙な表現の違いの判断に際して、その日本語能力の高さが論文の質の担保に貢献していたことは間違いない。

#### **【審査結果】**

以上見てきたように、趙翻氏の論文は謝罪言語行動研究および日中対照研究の分野に新たな研究の視点を提供し、貴重な成果をもたらしたと高く評価できる。また、文学研究科(国文学専攻)の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって、趙翻氏の博士学位請求論文は本学博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判断する。